

シベリアの考古学調査

橘 昌 信

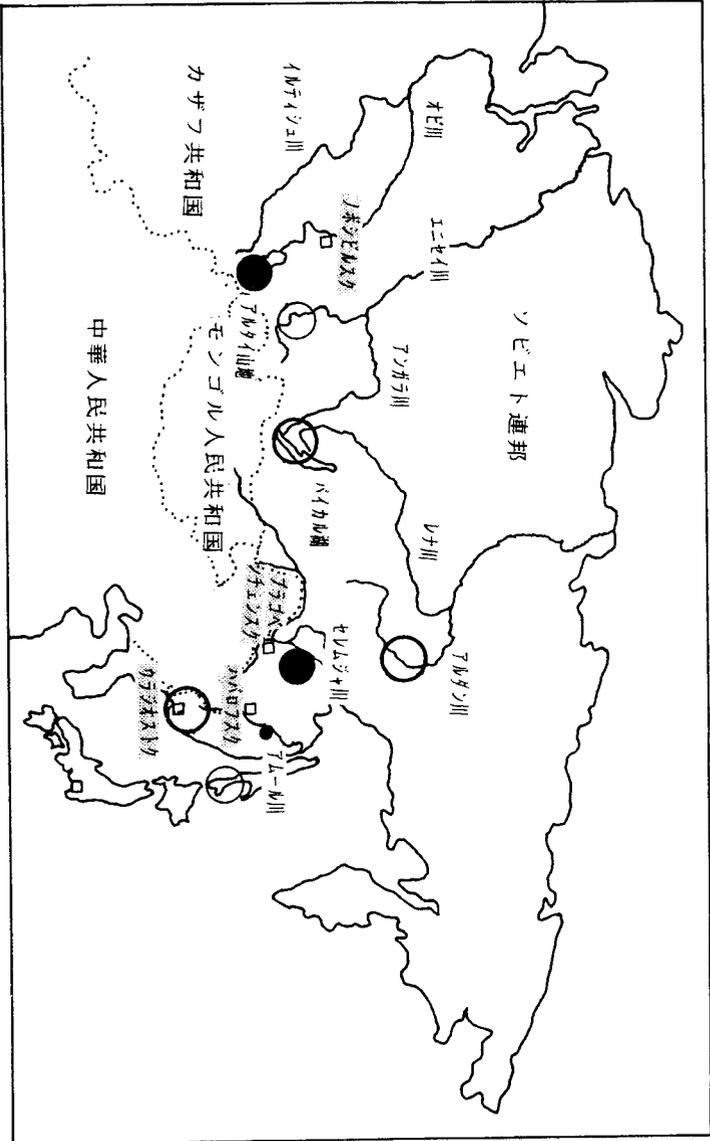
一、日ソ共同考古学調査へ参加

一九八八年の夏、シベリアにおいて一ヶ月間、日ソ共同考古学調査に参加するという貴重な機会を得た。

加藤晋平千葉大学教授と、ソ連科学アカデミーシベリア支部、歴史・言語・哲学研究所所長ゼレビャンコ博士とがそれぞれの窓口となって、日本とソ連の初めての共同調査が六年間の計画で開始されたのである。

一九八六年の第一次共同調査は、日本から加藤教授以下五名の研究者が西シベリアのアルタイに出かけて調査を実施した。一九八七年の第二次共同調査は、ゼレビャンコ博士以下六名の研究者が日本に招かれ、北海道から九州の各地を訪れ、旧石器時代の遺跡・遺物の調査と、研究者との意見の交換を行った。

その際、ソ連の研究者一行は、別府大学にも足を伸ばし、別府大学付属博物館がこの一〇年にわたって調査を続けていた大野川流域を中心にした旧石器時代の資料を見学し、その成果を高く評価したのであった。一九八九年に予定されている第四次共同調査では、大野川流域において共同発掘調査を希望していることから、火山灰の堆積が発達している大野川流域や大陸に近い九州の旧石器文化研究に対する関心の強さがうかがえる。



シベリアでの調査地 (●) と旧石器時代遺跡の主要遺跡分布 (○)

今年の二月、加藤教授から、シベリアでの第三次日ソ共同考古学調査のスタッフの一員として、参加の誘いを受けた。日本と関係の深いシベリア細石器文化の調査をアムール川流域で、さらに、今後日本で本格的な研究が開始されると考えられる中期旧石器文化の調査をアルタイ山地で直に行う機会は皆無に近いだけに、喜んで、今回のシベリアでの第三次日ソ共同考古学調査に参加したのである。

一九八八年七月八日、新潟空港から、日本海を北上し、サハリン（樺太）の近くから西へ方向を変えたアエロフロートのジェット機は約二時間一〇分後に、シベリアの空の玄関であるハバロフスク空港に到着。空港では、今回我々一行五名を招待してくれたゼレビャンコ博士と研究所所員の出迎えを受ける。

二、アムール川流域の調査

シベリアでの最初の調査のため、二〇名程度が乗ることができない小さな船で、ハバロフスクからアムール川を下る。アムール川はシベリア東南部に源を発し、中国東北との国境に沿って東流し、さらにオホック海へと注ぐ世界第八位の大きな川である。このアムール川はシベリアの川の中にあつて、太平洋側に注ぐ唯一つの大河で、サハリンを介して日本列島の北とシベリアとの交流のルートが、古くから考えられている。

実際、大正から昭和の前半に、日本を取り巻くアジア諸地域をフィールドにして、考古学・人類学・民族学の諸分野で偉大な調査研究業績を遺した鳥居龍藏博士は、このアムール川にも足を延ばし、日本との関連を調査している。日本の研究者で学術調査を目的にアムール川を下るのは、鳥居博士以来初めてのことと知らされ、身の引き締まる思いであつた。

川岸が何処に有るか確認できないほど広く、至るところに数多くの中洲が発達しているアムール川を約五時間ほど

下った右岸にサカチアリーアン遺跡とガーシャ遺跡の二遺跡が隣接して在る。これが最初の調査遺跡で、シベリアの歴史・言語・哲学研究所のメドヴェージェフ先生以下二〇名近い調査スタッフのキャンプに迎えられる。

サカチアリーアン遺跡は新石器時代（BC約三〇〇〇年）の遺跡で、河岸に転がる大きな玄武岩に、曲線をモチーフにしたヘラジカ・イノシシなどの動物、歌舞伎のくまどりを連想させる人の顔や人面（マスク）など、三〇点ほど岩の線刻画が見られる。本来これらの線刻画の大半は、川岸に露出していた岩壁に刻み込まれていたが、永い年月の間に川辺へ崩れ落ちたものである。線刻画の時期については、この地方の新石器時代の遺跡から出土している土器に施されている文様の類似から推定されているが、線刻画を残した人々についてはまだ解明されていないとのことである。主要な線刻画は拓本（拓影）と写真で記録する。

ガーシャ遺跡は、河岸から一段上の段丘上に位置した新石器時代から中石器時代の多層遺跡で、約二メートルの堆積土層に複数の文化層が認められる。特に、この遺跡の最下層からクサビ形細石核・細石刃を始めとする石器群と共に発見された土器は、この地域の中石器時代に位置付けられるもので、放射性炭素による年代は、12960±120年BPの値が出ている。現在のところ、シベリア最古の土器の一つと考えられており、シベリアでの土器の起源を考える上で重要視される。

長崎県の福井洞穴・泉福寺洞穴を始め、日本においても細石核・細石刃と共に一万数千年前と考えられる土器が発見されているだけに、今後、シベリア・中国・日本を含めて、東北アジアにおける旧石器時代の終末から新石器時代への推移、たとへば、細石器文化と土器の起源の問題が究明されることになろう。いずれにせよ、寒冷地のシベリアにおいて、日本とほぼ同じ時期に、土器が存在していることの具体的な一つの証拠がガーシャ遺跡で示唆されている。ガーシャ遺跡の調査期間は僅か二日間だけであったが、発掘主任のメドヴェージェフ先生から現地で説明を受け、シ

ベリア最古の土器が出土した土層を削って堆積状況を観察し、さらに、調査区の一画を地元の研究者と一緒に発掘することができた。(写真1)

シベリアの発掘では、宿泊施設の有るところから調査地が遠いため、遺跡近くにキャンプをはって調査を行っており、この遺跡の調査も、それ以後の調査でもテント生活であった。

短い調査期間にもかかわらず、極東地方の少数民族の『ナナイ族』にも接することができた。極東地方のアムール川下流域・沿海地方・サハリンには、歴史・言語・生活などが類似したいくつかの民族が住んでおり、約九九〇〇人といわれるナナイもその一つである。

ナナイの形成はツングース・中国・モンゴル・朝鮮などの多くの要素が加わっていると考えられ、言語的にはツングース・満州語である。彼らの生業は、アムール川を上ってくる季節的なサケ漁を基盤にした漁撈と、毛皮や食肉を獲得するための狩猟である。サカチアールアン遺跡、ガーシヤ遺跡から五〇〇メートルほど下った川岸にマナイの小さな村が在り、その村からお年寄り・子供を含めて約二〇名のナナイの女性が、我々のキャンプにやって来たのである。(写真7)

彼女たちはアイヌの女性が身に着けているのに類似した『テトゥエ』とよばれる赤・明るい空色・濃い緑色の長衣をまとい、古くから伝わっている歌と踊りを披露してくれた。何世代にもわたって大切に着られたと思われる晴れ着(結婚衣装)を見せてくれた。その晴れ着には、南の海でしか取ることができない子安貝や小さな金銅製の飾り板がとり着けられ、さらに、多くの刺しゅうが施されている。晴れ着一枚にもナナイの生活の歴史をかいま見ることができた。その後、ハバロフスクに戻り、次はアムール川の上流域の調査のため、再びゼレビャンコ博士一行と共に、チャーターのジェット機でハバロフスク空港を発ち、六〇〇キロ西のブラゴベシチュenskへ移動。眼下のアムール川流

域には、無数の小さな湖沼や広大な湿地がどこまでも続き、改めてシベリアの大きさを感じる景観である。ブラコベシチェンスクは緑の多い町で、アムール川（黒竜江）の対岸には中国の愛輝（黒河）の町が広がっているのを目の当たりにすることができる。

アムール川地質学研究所の船『ナフカ号』に乗り換え、アムール川上流のゼア川・セレムジャ川を約四〇〇キロさかのぼる。船内で地質学研究所のソロキン先生にはアムール川上流域の地形・地質について、さらに、ゼレビャンコ博士にはアムール川上流域の後期旧石器時代の遺跡群についての講義を受ける。アムール川上流域に外国の研究者が入るのは今回が初めてであり、今後のシベリア考古学研究での一つの中心になるとのことである。ブラゴベシチェンスクを発って約一時間後、セレムジャ川とその支流であるウルマ川の合流点にある第五〇遺跡（ウスチ・ウルマ遺跡）のキャンプ地に到着。（写真2）この遺跡の発掘調査が、今年の夏も約四〇日間の予定で地元の研究、大学の教員、学生など四〇名余りによって行なわれており、この調査に参加する。

遺跡は二つの川に挟まれた小高い丘に立地しており、丘の頂上部・斜面、さらに斜面を下りた平坦部にそれぞれ調査区が設定されて、長期計画の発掘が継続的に実施されている。これまでの調査成果について説明を受けながら、各調査区の堆積状況や出土遺物を見学し、さらに我々のために設定された調査区の発掘を行う。北海道・東北地方の資料に類似した細石核・槍先形尖頭器などの石器が出土している。

この遺跡のキャンプをベースにして、セレムジャ川流域においてこの三八年の間に発掘調査が実施され、多大な成果が見られたバルカスナヤ遺跡を始めとする後期旧石器時代の遺跡を七箇所、それにシベリア考古学の父と言われるオクラドニコフ博士が二五年前に調査を行ったグラマツウーハ遺跡などを船で訪ねる。

遺跡はいずれも草原あるいはブッシュを掻き分けて登った小高い丘に立地しており、セレムジャ川・ゼア川、それ

にどこまでも広がる緑の草原が見渡せ、日本の夏を思わせる日中の暑さの中で、一服の清涼剤になる素晴らしい眺めを楽しむことができる。各遺跡の文化層の堆積状況の観察・記録と調査区の一部を實際に発掘する。素晴らしい景色と対照的に、調査およびテント生活ではカ・ブヨ・アブなどに悩まされる。今年は例年に比べ、これらの虫の発生は少ないとのことであるが、我々にすれば十分過ぎるほどの十分な数の虫が、昼夜を問わず飛び回っている。

アムール川流域の遺跡群見学および発掘調査は一〇日あまりであったが、アムール川流域の後期旧石器時代から中石器時代の遺跡・遺物と北海道・東北との強い関連性を十分にうかがうことができた。

すなわち、日本の北海道・東北地方の後期旧石器文化終末に特徴的に見られる舟底形（クサビ形）細石核や荒屋型彫器などの石器群は、日本ではおよそ一五、〇〇〇年前ないし一四、〇〇〇年前に出現したと考えられている。ところがこれらの石器群はシベリアのバイカル湖周辺、レナ川上流、アンガラ川上流などの諸地域では、約三万年前に近いころから既に存在していたとされている。アムール川の流域においても、二万数千年前あるいは二万年前の前後の年代が、ウルチ・ウルマ遺跡やバルカスナヤ遺跡の調査によって明らかにされつつある。従来から言われていることであるが、東北日本の細石器文化は、南シベリア・東シベリアからアムール川の極東を経て東北日本へという一つのルートが、年代の傾斜や地理的なことなどから十分考えられることになる。この数年および現在進められているアムール川流域の発掘調査およびその結果は、日本を含めた東北アジアの後期旧石器時代から中石器時代の研究の発展に大きく貢献するものと考えられる。

船で再びブラゴベシチェンスクに戻る。この都市は指定観光地になっていないため、日本の観光者はもちろん研究者も入ったことが無く、我々が最初の訪問者と聞かされる。ここでは地質学研究所と博物館（写真10）を訪ね、さらに地質学研究所で行なっている恐竜の化石発掘現場を見学する。全長が五ないし六メートルほどの水辺に棲息する恐

竜で、ほぼ完全な形の化石骨が調度出土していた。

地質学研究所主催の夕食会に招かれ、一週間ぶりに、食事らしい食事にありつく。その夜、ブラゴベシチェンスクの空港からチタ經由でノボシビルスクへ、六時間の夜行列車ならぬ『夜行飛行機』。これも広いシベリアならでの空の旅と言えよう。

三、アルタイ山地へ

早朝ノボシビルスクの空港に着き、その日の昼過ぎ、アメリカの研究者二名と合流し、二〇名ほどが乗ることのできるチャータのヘリコプターで一路アルタイ山地へ出発。途中二回給油を行って、五時間後、標高約二五〇〇メートルのゴルノアルタイ自治州アルタイ山地のクチュエラ遺跡に到着。

アルタイ山地は西シベリアから始まり、ゴビ砂漠まで全長二〇〇〇キロにわたって、標高二〇〇〇メートルから四〇〇〇メートル級の山が連なっている。尾根の間を縫うようにして飛ぶヘリコプターの窓から見える山頂近くは雪をいただき、谷には氷河、さらに、その痕跡のモレーンと青い小さな湖などの氷河地形が眼下に開けている。やや高度が下がった尾根には白い石灰岩と茶色がかった緑色の苔類が、さらにその下にはモミ・カラマツ・シベリアマツなどの針葉樹が広がり、麓からはみどりの草原が山地に向かって延びている。これらの自然が織り成すアルタイ山地の六月・七月は、一年中で最も美しい季節と言われていることが納得できるスケールの大きな素晴らしい景観である。中国との国境まで直線距離で約八〇キロという山奥の、カラマツ・モミ・シラカバなどの林の空き地に着陸。

クチュエラ遺跡は幅約三〇メートル、高さ一五メートルもあろうかと思われる岩山の裾に立地しており、遺跡のそばを中国との国境に近い氷河に源を持つクチュエラ川が勢いよく流れている。この遺跡の調査は昨年開始されたばかり

であり、今年もソ連科学アカデミーシベリア支部の研究所員で、ノボシビルスク教育大学教授のモロージン先生と三〇名ほどの学生によって、二年目の発掘調査がキャンプをはって行なわれている。

氷河作用の擦痕を残す大きくえぐれた石灰岩の岩山は、大昔から地元の人によって『聖なる地』として信仰の対象になっている場所であり、また、この一帯は岩塩がとれる場所としても重要視されているとのことである。岩山の裾の岩壁には、シカ・ヤマヤギなどの動物、シャーマン（呪術師）と考えられる人物、馬に乗った人物などの岩壁画が数多く刻まれている。その岩壁画は、現在の地表面より上に露出した岩に刻まれているものと、発掘によって初めて発見されたものが有り、長い期間にわたって刻まれたことがわかる。その古いものは約五〇〇〇年前のアファナシエバア文化にさかのぼる可能性があり、これからの調査によってさらに解明されるであろう。

岩壁画が刻まれている岩山の前面（岩陰のテラス）の発掘では、新石器時代から中世にかけての『祭り』に関係すると考えられる獣骨（大半はマラールというシカの一種）が多量に出土している。獣骨の量に比べて、土器・石器・骨角器などの日常生活用具と考えられる遺物は極端に少ない。やはり特殊な性格、たとえば動物を神に捧げる祭りを執り行なった場所との解釈ができ、岩壁画とその前面から出土する獣骨は深い関連を持つものである。また、獣骨と一緒に出土している川から運んで来たであろう大きな円礫や落盤による平たい石も祭祀遺構に関係するものと思われるが、現在までの調査では不明である。いずれにせよ、アルタイ山地での初めて祭祀遺跡として注目されつつあるクチュルラ川に接した林の中に設営されたキャンプをベースにしたここでの調査生活は、アムール川の調査のように虫に悩まされることもなく快適である。朝夕はセーターの上にジャンパーを着込むほど冷え込むが、昼間は爽やかでしのぎやすい気候である。

調査期間の一日は、クチュルラ川沿いに山道を約一時間ほど下り、そこから研究所の四輪駆動のトラックに乗り込

み、山道を揺られること約二時間で、草原の小高い丘にある突厥(チュルク)族の遺跡に到着する。

この民族は、六世紀の中葉から約二〇〇年間にわたって、アルタイ山地・モンゴル高原を中心に支配しており、見晴らしの良い草原を聖地と定めてクルガン(石あるいは土を積んだ墓)を築き、さらに石人(カーメンナヤ・バーバ)を立てている。我々が訪ねたのもそれらの一つで、崩れかけたあるいは盗掘をうけた直径一〇メートル前後で、低い墳丘(マウンド)を持つクルガンが五・六基と幅四〇〜五〇センチ、高さが一メートルに満たない平石に刻まれた石人一〇基余りが、草原の中に静かにたたずんでいる。これまで世界史の概説書や教科書でしか知ることのなかった壮大な北アジア史の一ページに、足を踏み入れることができたのは、予定外の大きな収穫であった。

話しは少しそれが、クチュエルラ遺跡の調査中、アルタイ山地でオシカの狩猟を行っているアルタイ人の狩師の親子に会った。(写真12) 馬に乗り、背中に銃を下げた狩師の出で立ちには物珍しいものであったが、狩師の顔や体付きは日本の地方に行けばどこでも見掛けることができる風貌をしており、アムール川下流域でナナイ(族)会った時と同様な親近感を覚えた。そして、ふと以前何処かで読んだことのある『アルタイは日本人の故郷』という言葉を出した。このことは科学的に十分証明されるまでには至っていないのであろうが。

ただ、最近、人類学者たちは、一連の分子生物学の研究分野で、日本民族のルーツを究明している。たとへば、Gm型遺伝子の研究によると、日本民族は北方型遺伝子による研究結果から、北方型蒙古系民族に属するもので、その起源はシベリアのバイカル湖畔にあるという一つの結論を出している。日本人が持っているGm型遺伝子の割合が、シベリアのブリヤート人や中国北部の中国人の割合とほぼ同じで、しかも血液の特徴とも一致するというのである。北方型蒙古系民族に特徴的なD₁₇遺伝子は、バイカル湖北の民族をピークとして、南に下がって日本へいたるものと、ベーリング海峡を越えてエスキモーの諸部族への、二つの大きな流れがあるという。また、白血球抗原型でも日本人

はアジアの北方系民族に共通する抗原の特徴が存在するという。これらのことは、日本民族の祖先が、シベリアの民族と近い関係を示唆する研究結果と考えられ興味深い。

クチュエルラ遺跡での調査を済ませ、そこから今回の最後の調査地である西シベリアのジェニソフへ、ヘリコプターで移動することになっていた。ところが、予定の日になっても迎えのヘリコプターが飛んで来ず、食糧の少なくなつたキャンプに三日間待機されれるというハプニングのおまけがついた。クチュエルラ遺跡の今年の発掘調査はすでに終了し、それに、いつヘリコプターがやってくるか解らないため、キャンプを離れて周辺の踏査に出掛けることもできず、何をするでもなく、全く暇間な三日を過ごす。麓にある飛行場周辺の天候が悪化していたことが原因とのこと。三日目の夕方、やっと『救出』された時は、国籍を問わず全員の顔に安堵の喜びをかいまみることができた。およそ三時間後、西シベリアの中期旧石器文化研究のメッカであるジェニソフに到着する。

四、中期旧石器文化研究のメッカ ジェニソフ

アルタイ山地を流れるチョールヌイ・アヌイ川は、オビ川上流域の一つの支流で、この流域だけでも一七〇〜一八〇の数の洞穴が存在している。これはアルタイ山地が石灰岩で構成されていることに深く関係している。すなわち、石灰岩が水の侵食を受けて、自然に洞穴が形成されるのである。これらの洞穴の中には、遊牧民が宿泊のため今も一時的に利用しているものがあるとのことであり、大昔の人々が使用していたことも当然うなずけるのである。

アヌイ川から約二八メートルの高さに開口しているジェニソフ洞穴は、この地域の最も代表的な洞穴遺跡で、一九八二年から発掘調査が始められ、これまで多くの研究者が参加している。洞穴の内部の調査区では地表面から六メートル近く掘り下げられ、見事な文化層の重なりが見られる。地表面に近い上の層からは中世や青銅器時代の遺物が

出土し、下層からは旧石器時代の遺物が発見されている。下層の一一層から二二層にかけての文化層からは、約三五〇〇〇年前から五〇、〇〇〇年前の中期旧石器文化の遺物が出土している。特に注目されるのは、ヨーロッパの地域を中心に流行した『ルバアロワ技法』による剥片と石核、さらにヨーロッパの中期旧石器文化の典型的な石器であるムステイエ型尖頭器などが存在していることである。これらは、ヨーロッパの石器文化の伝統がシベリアに拡散したことを示す好資料であり、文化の波及・伝播を考える上で重要視される。各専門分野の発掘担当者に説明を受けながら、洞穴の文化層を見学し、層序ごとの出土遺物をつぶさに観察することができた。(写真3・4、図1)

ジェニソフ洞穴の対岸に、我々を含めた調査者のテントが張られており、ここをベースキャンプにして、一週間の調査活動を行う。テントから四〇〇メートルほど離れた場所には、半恒久的な木造作りの四室ほどの研究室が設けられており、ここに発掘資料の一部が保管され、整理作業が行なわれるなど、この地域の調査研究の中心的な役割を果たしている。

ストラシユナーヤ洞穴は、ジェニソフ洞穴から西へ百数十キロのカザフ共和国より所に所在する、アルタイ山地の中期旧石器時代の代表的な遺跡の一つである。この洞穴の見学もヘリコプターが使用され、低空飛行するヘリコプターの小さな円い窓から、草原と森林、それに石灰岩が織り成す景色を間近に見ながら、約一時間ほど夏のアルタイ山地を空から満喫する。

洞穴はイニョイ川とティギレック川の合流地点を眼下に見下ろす石灰岩の険しい岩山の斜面に開口している。ここからの見晴らしはすこぶる良く、この洞穴の住んでいた狩人は二つの川の近くに集まるマンモスやバイソンなど、この洞穴から出土している動物の動きをいち早くキャッチし、石の道具を手にしてこの崖をかけ下りていたのであろう。

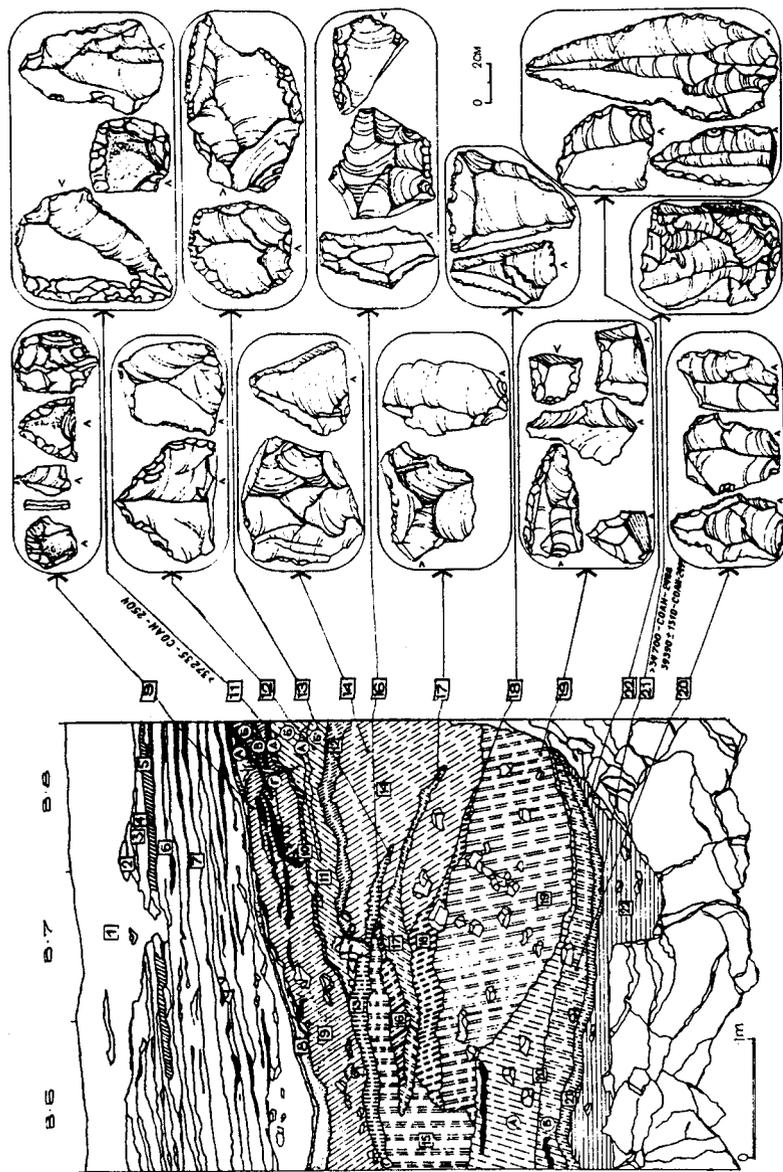


図1. ジェニソフ洞穴の文化層と主要出土石器

АРХЕОЛОГИЧЕСКИЕ

Полосов А. Г., Мещеряк В. А.

ストラシュナーヤ洞穴の規模は、今回訪れた他の洞穴に比べて小さいが、洞穴内の土層堆積は、約九・五メートルまで掘り下げた試掘溝でも岩盤に達しない深さを誇っている。この洞穴の調査主任であるオブドフ先生の説明によると、遺物は地表から六・五メートルの深さまで出土しているとのことであり、実際、ひんやりとした試掘溝に入り文化層を観察することができた。この洞穴の地表面近くからは新石器時代の遺物が、その下層から約二五、〇〇〇年前の後期旧石器文化の遺物が、それぞれ出土している。さらに、最下層近くには、およそ四〇、〇〇〇年前と推定される中期旧石器文化の文化層があり、ルバァロフ技法による考えられる石核・剥片などの石器が発見されている。

この洞穴の発掘調査は一九六六年から開始されており、全面発掘までには今後二〇年を要するとのこと。このことは九メートルにおよぶ堆積土層の厚さや、発掘した土を四五メートル下のチギレック川まで下ろし、水洗いをするという細かな作業を進められていることからもうなずける期間である。洞穴の開口部には、真下の川に向かってワイヤーと縄が張られており、これを用いて水洗する土を下ろしているのである。これと同じ仕組みをセレムジャのウスチ・ウルマ遺跡においても見ることもできた。

次の見学先であるカーミンナヤ洞穴は、ジェニソフ洞穴から約三〇キロ上流に位置する小さな谷の奥まった石灰岩の洞穴で、ジェニソフ洞穴の調査と並行して発掘が進められている。洞穴の奥行きはほとんどなく、むしろ岩陰遺跡と呼んだ方が適当と思えた。調査が実施されている洞穴の前庭部（テラス）は、深さ四メートルほど発掘されており上層からは新石器時代の土器などが出土し、中層から約一二、〇〇〇年前の細石核やスクレイパー（搔器・削器）などが出土している。下層は中期旧石器時代のムスチエ文化に対比されることであるが、現地に建てられた小さな研究室に保管されている資料では、特徴的な石器を認めることができなかった。石灰岩の洞穴遺跡ということ、毛サイ・バイソンなど多量の獣骨が出土しており、小さな骨はふるいや水洗いによって検出している。（写真6）

このキャンブ生活では、アルタイ地方に古くからある二つのタイプの住まいが使用されていた。その一つは洞穴の直ぐ前に建てられているチューム（アルタイ語でアイユ）と呼ばれる直径が五メートルほどの円形の夏用の家である。腕の太さほどの二七本の柱を円錐形に組み立て、屋根にはカラマツの樹皮を地面まで葺き下ろしている。入り口は巻貝の口のように二重になっており、内部は中央に石組みの炉が設けられ、それを取り囲むようにしてコの字形の板床が設けられている。天井には隙間の空いた棚がぶら下がり、干し肉が置かれている。旧石器時代・新石器時代さらに青銅器時代を通じての、普遍的な住まいのあり方を想像させるものである。洞穴遺跡とのとり合わせが一段と興味深いものにした。（写真11）

今一つは、カラマツの丸太を横にして一四本ほど積み上げたユルタという住まいである。内部の中央にハラサとよばれる梁つき柱が立てられ、壁沿いには板床が設けられている。普通、ロシア人はこれらの木造の家を『なた（まさかり）』一本で作るということである。

ウスチ・カン洞穴はオビ川の支流の一つであるチャリシ川の上流近くに所在しており、ジェニソフ洞穴からほぼ北に五〇キロほどの距離である。普段のここでのキャンブ生活の開始時間より二時間近く早い八時三〇分、ライトバン二台に分乗して出発する。途中、村境のヤカノース峠で訳も解らず下車し、道から少し入ったモミの林に案内される。モミの枝には細く裂いた布地が数多くぶら下がっている。我々にハンカチを裂いた布切れが配られ、枝に結び付けるようにとのこと。これはアルタイ地方の一つの習慣で、旅人が自分の土地を離れる時、再び無事で帰ってくることできるように、願いをこめて行なわれる儀式との説明を聞いた。アルタイ地方には、自然と人間との心の交流がこのような素朴な形で残され、今もこうして行なわれていることに對して、ある種の感動を覚えた。

ウスチ・カン洞穴は、ウスチ・カン村から東南に四キロほどの草原にそそり立つ独立した白い石灰岩の岩山の斜面

に所在し、前面に流れるチャリシ川から四〇〜五〇メートルは有るのではないかと思われる高さに、洞穴の大きな口を空けている。この洞穴の立地からして、それこそ何処からでも目立つ存在であり、アルタイ山地で最も早く調査の手が入ったのは当然のことであろう。岩山の北側斜面を巻いて洞穴に登ることが出来るが、発掘器材などの荷物を持ったの毎日の登り降りは、大変に思える脆い足場と急勾配である。しかし、一度洞穴の開口部に立つと、登る苦労を瞬時に吹き飛ばすほどの素晴らしい展望を楽しむことができる。ただ、洞穴内部のおびただしいヤギの糞の臭いには閉口するが。対峙する中央アルタイ山地との間に幅数キロ草原がほぼ南北に長く広がり、ウスチ・カンの村も見渡せる。野獣の捕獲を糧とした旧石器時代の人々にとって、この洞穴からは移動する動物の群れを手取るように見張ることができ、さらには、その狩猟に最もふさわしい行動を容易に起こすことができたであろう。(写真5)

間口は約八メートル、奥行き一〇数メートルのこの洞穴から、三〇〇点ほどの石器や山岳ヒツジなどの獣骨が出土している。石器群には後期旧石器文化と中期旧石器文化の二つの時期が存在し、特に四〜五万年前と考えられるルバァロワ文化の様相を持つムスチエ文化の存在が注目されている。

ウスチ・カン洞穴を後に、さらに北東へ約六〇キロの中央アルタイ山地はほぼ中央に開ける扇状地の末端にチムチン遺跡が立地している。扇状地の草原には色とりどりの小さな草花が一面に咲きほころび、遺跡に足を踏み入れるのにちゅうちよするほどである。ウルス川に面する崖面に調査区が設けられており、シュニコフ先生から発掘状況についての説明を受ける。発掘区の断面には砂泥・小さな礫と共に、石器類が顔を覗かせており、断面採集を行う。(写真7) この遺跡の石器類は二次堆積によるものと考えられるが、見事なルバァロワ石核・ルバァロワポイントが発見されており、今後、アルタイ山地の中期旧石器文化の開地遺跡として重要視されるであろう。

チムチン遺跡の草原でパン・チーズ、缶詰などの昼食をとる。シベリアの野外調査では、現地でききを集めてすぐ

火をおこし、紅茶・コーヒーを入れることがごく自然に行なわれている。

チムチン遺跡から六キロほど離れた片岩の岩山の裾に立地する旧石器時代のウスチカラボム遺跡を見学し、さらに立石で周囲を円形に囲んだアファナシエバ文化のクルガン（墓）に立ち寄り、（写真13）その後一路ジェニソワのキャンプ地に向けて舗装されていない悪路をひた走り、夕方帰り着き、充実した一日を終える。

チムチン遺跡やストラシユナーヤ洞穴など一〇〇キロを超すような遠くの遺跡の見学と共に、ジェニソワ洞穴の近くに所在する旧石器時代の開地遺跡の見学も行った。

その一つがウスチカラボム遺跡である。遺跡はジェニソワから上流へ数キロ上ったアヌイ川に接する低い丘の斜面に立地している。川に最も近い斜面に四メートル程の深さの大きな調査区が設けられ、アヌイ川流域の基本的な土層の堆積状況を観察することができた。さらに丘の頂上部に向かって、五箇所の小さな試掘溝が設定され、四・七メートルの深さ発掘されている。

この遺跡は中期旧石器時代末から後期旧石器時代にかけての時期が考えられる。第六層から、ルバァロワ技法によるものと推定できる縦長の剥片と尖頭器など石器が出土している。さらに、第五層には大形の石刃、両面加工の石器が見られる。これらの石器群の時期については、第五層下部から出土した資料による放射性炭素の年代測定で、約三〇、〇〇〇年と三一、〇〇〇年前という値が出されている。もし、この年代が正しいものとすれば、アルタイ山地において三万年前に近いころまでルバァロワ技法の伝統が存在することになる。シベリアにおけるルバァロワ技法の伝統のあり方やその文化の様相、中期旧石器時代と後期旧石器時代の過渡期の絶対年代をどのように把握するかなどの大きな問題に関連する重要な遺跡と言えよう。

ジェニソワ洞穴の対岸で、調査団のキャンプ地に隣接するなだらかな低い丘に位置するウスチアヌイ遺跡でも大規模

な発掘調査が進められている。礫層の上に四メートル近い土層の堆積が見られ、三枚の文化層が存在するとのことである。(写真8) この遺跡の資料については今回は実際に見学することができなく、遺跡の内容・石器群については良く理解できなかった。

ジェニソフでのキャンプ生活の八日間に、この地域の主要な遺跡をほとんど実際に見学することができたのは今回の最大の収穫といえよう。また、現地の研究室では、ジェニソフ洞穴を始めとして、チムチン遺跡・ウスチカラボム遺跡などアルタイ山地の中期旧石器文化の石器を手に取って観察・記録する機会も与えられた。また、アムール川上流セレムシャ川のバルカスナ遺跡の石器群についても同様である。さらに、この調査期間中にクラスノヤルクス・バルナウルなどシベリア諸都市の研究者が集結したため、今回我々が訪ねることができなかった地域の遺跡や遺物の情報も得ることができた。特に、アンガラ川上流域でニコライ・ドロゾフ先生が発掘調査を行ったウスチコヴァ遺跡の資料を、先生の好意で見ることができた。

ウスチコヴァ遺跡は三枚の文化層が認められ、下層は約三一、〇〇〇年前、中層は二四、〇〇〇～二三、〇〇〇年前、さらに上層は約一四、〇〇〇年前(一一、〇〇〇年前)ということである。下層の資料については検討の余地が残されているように思えたが、中層の資料は量的にも質的にも優れたものである。中でも、マンモスの牙を材料にして作られている長さ八センチ、幅五センチのマンモスを形どった象牙製品は素晴らしい資料である。象牙製品の素材になる『牙の剥片』も初めて見る珍しい資料であった。

これらの遺跡および資料見学の他に、僅か半日であったが、モロージン先生が中心になって発掘が進められているアヌイ地方のクルガンの調査にも参加できた。アヌイ川の支流である小さな川と石灰岩・片岩で構成されている山との中間に開けたなだらかな草原に、直径一五メートルほどのクルガンが築かれている。平たい片岩の板石を積み重ね

その上に土を盛り上げているが、わずかな高まりが見られる程度の低い墳丘（マウンド）である。盛り土と板石を除くと、中央の主体部に楕円形の土壙が設けられている。今回の調査期間中、八名のパネラーの先生方による旧石器時代のシンポジウムがジュネソワ研究室で開催された。英語の通訳と発電機を電源にしたスライドを交えて展開された興味深い内容であった。

九日目の朝、ジュネソワのキャンプ地を出発し、約四〇キロ下った町の小さな空港から一〇数人がやっと乗ることが出来るプロペラ機でアルタイ山地を後にして、北へ約二〇〇キロのバルナウルに向かう。昼食後、そこからライトバンの車に乗り換え、さらに二二〇キロ北のノボシビルスクへ移動する。何処までも続く直線の道路と見渡す限りの平野が広がり、山なみが全く目に入らない広大な景色である。夕方になってやっとノボシビルスクに着く。

五、科学者の町 アカデムゴロドク

ロシア語で新しい町という意味のノボシビルスクは、オビ川に開けた商業都市で一〇〇万を超える人口を誇っている。町の中心から車で三〇分ほどの所に、アカデムゴロドクと呼ばれる科学者の町がある。この町には各種科学研究機関が点在しており、今回我々をシベリアの調査に招待してくれたゼレビャンコ博士は、この町の研究機関の一つである歴史・言語・哲学研究所の所長を務めている。

アカデムゴロドクで二〇日ぶりにホテルに宿泊する。シベリアのホテルの施設・設備は日本のそれにくらべると、快適さ・便利さでの点でどうしても見劣りがする部分がある。しかしながら、これまでのアムール川流域やアルタイ山地での慣れないキャンプ生活を続けていた我々にとっては、照明・風呂・トイレ・ベッド・レストランなどの有るホテルは快適そのものである。もちろん、キャンプ生活にはキャンプ生活の良さや楽しさがあり、今回それを十分味

わった上でのことであるが。

翌日は朝からゼレビャンコ博士の研究所を訪ねる。四階建ての近代建築で、正面入り口には、シベリア考古学の父として、内外の研究者から高く評価され、また、この研究所の初代所長である故オクラドニコフ博士のレリーフが掲げられている。一階のピロティには、シベリアの象徴ともいふべきマンモス象の全身骨格の標本が、我々を見下ろすように置かれている。(写真14)

最初の計画では、この研究所で三日間過ごすことになっていたが、クチュエルラ遺跡でヘリコプターの待機のため三日間を費やしたことで、ここでの見学は一日だけになってしまった。この短い時間を有効にというゼレビャンコ博士の図らいで、三階の研究室に案内された。この研究室では、今年の春に発掘調査が行なわれたばかりの蒙古の旧石器時代の遺物整理が、研究所所員で発掘担当者のペトリン先生によって進められていた。石器の見学とスライドを用いての遺跡の説明を受ける。英語のできる女性の助手が我々への通訳を労をとってくれた。これまでの蒙古の旧石器文化研究の大半は、表面採集の資料を通じて行なわれていたため、どうしても石器群の時期や組み合わせなど、基本的な研究が不足している。その意味からも三メートルにおよぶ堆積層の発掘調査で得た資料はまさしく好資料であり、その整理の進展によって蒙古の旧石器文化研究に大きく貢献するであろう。いずれにせよ、蒙古はシベリア・中国東北部・韓国と共に、日本を含めた東北アジアの旧石器文化研究で重要な地域だけに、最新の発掘資料と遺跡のスライドは印象に残った。

この研究所において、日本に隣接する沿海州を始めとする地域の旧石器文化の石器見学を楽しみにしていた。しかしそれが実現しなかったことを唯一の心残りにして、ノホシビルスクからハバロフスクへ、ブラック径由の夜行飛行機で向かう。ハバロフスクでは、調査団五名で今回の調査を振り返り、また、銘々でくつろぎ、シベリア調査の疲れを癒す。

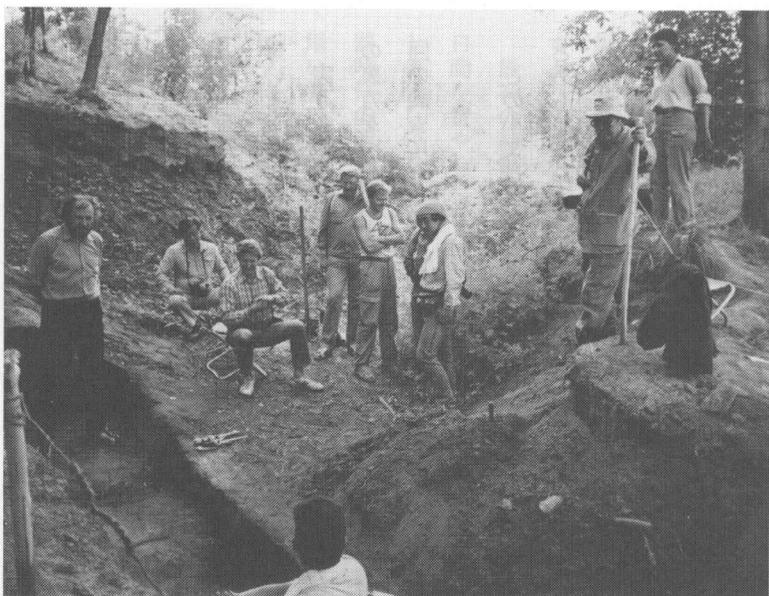
八月六日の午後、全員無事で新潟空港に降り立ち、今回の調査を終える。

六、おわりにかえて

今回の一ヶ月間のシベリア調査では、五日間だけがホテルで、それ以外はテントと寝袋というハードな生活であったが、それだけにシベリアの自然の広さと美しさを感じることができた。そして、アムール川流域とアルタイ山地で貴重な数々の遺跡とその成果の一端を直に学ぶ機会が与えられた。各地の遺跡調査のキャンプで、いわゆる『同じ釜の飯』を食べたことで、また、シベリアの大学生とのキャンプファイヤーやウオッカの杯を傾けながらの研究者との集いで、暖かい好意に触れることができたのは何よりの喜びであった。

実り多い今回の調査で、大変お世話になったゼレビャンコ博士を始めとするシベリア各地の研究者や学生それに調査の裏方をつとめてくれた多くの人たち、そして、調査団の加藤晋平・加藤九祚・畑宏明・梶原洋の諸氏、それに、今回の調査に対して理解を得た別府大学各位、以上のすべてのの方々に対して、心からの感謝の意を表したい。

この小文は今回のシベリアの考古学調査での私的な調査レポートである。正式な報告は加藤団長の下で、いずれまとめられることになろう。ここではほとんど触れることができなかったシベリアと日本の旧石器文化の対比や関連については、今回の体験を生かしながら筆者なりに改めて考えてみたい。



1, ガーシャ遺跡の調査(アムール川流域)



2, ウスチ・ウルマ遺跡(アムール川流域)



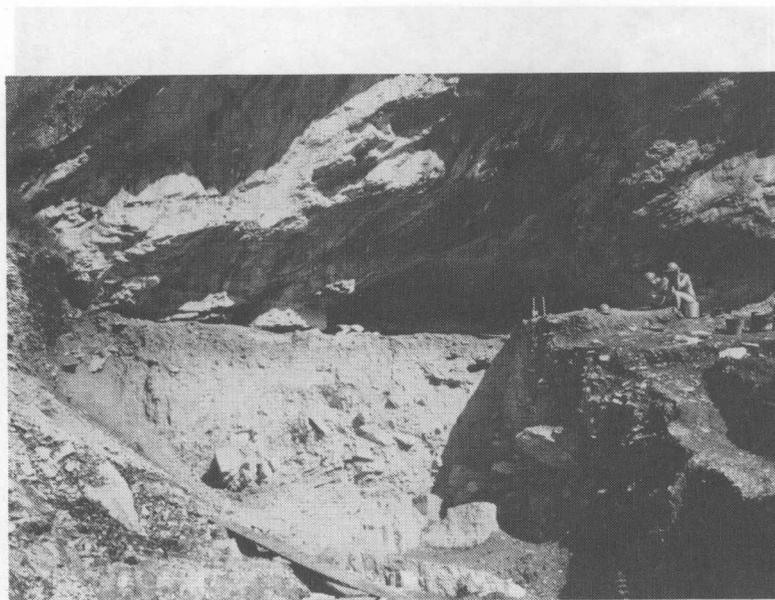
3. ジェニソワ洞穴(アルタイ山地)



4. ジェニソワ洞穴 22層出土の中期旧石器



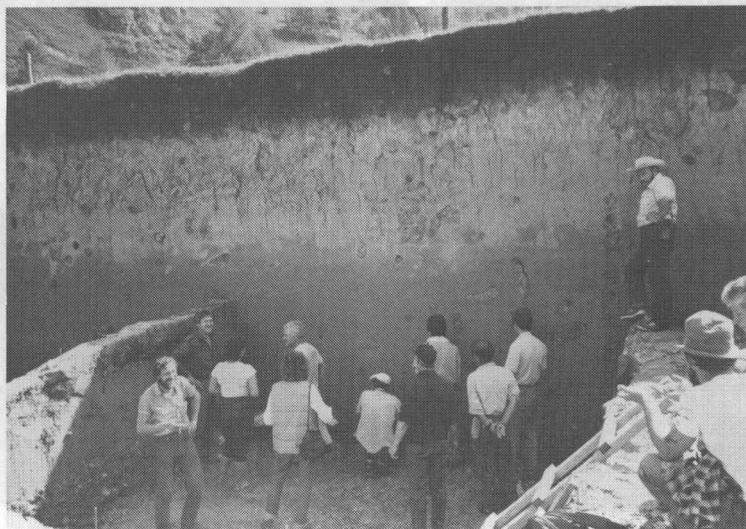
5. ウスチ・カン洞穴（アルタイ山地）



6. カーミンナヤ洞穴（アルタイ山地）



7 チムチン遺跡(アルタイ山地)



8 ウスチアヌイ遺跡(アルタイ山地)



9 ナナイ族の女性の踊り(アムール川流域)



10 オオツノジカ・ヘラジカの剥製
(ブラゴベシチェンスク博物館)



11 アルタイ地方の伝統的な家(夏用のチューム)



12 アルタイ山地の狩人親子



13 クルガン(青銅器時代の墓、アルタイ山地)



14 ソ連科学アカデミーシベリア支部
歴史・言語・哲学研究所
(ノボシビルスク)